

# 国際コミュニケーション学の可能性

【参加者(発言順)】

**根岸徹郎** | NEGISHI Tetsuro、フランス文学・文化、現代演劇

**小林貴徳** | KOBAYASHI Takanori、文化人類学、民族学、  
ラテンアメリカ地域研究

**今井ハイデ** | IMAI Heide、文化地理、文化研究、都市計画、都市史と都市社会学

**丸山岳彦** | MARUYAMA Takehiko、日本語学、コソボ言語学

**レベッカ・トンプキンス** | TOMPKINS Rebecca、地域研究

**宮本文** | MIYAMOTO Aya、英米・英語圏文学

【司会】

**鈴木健郎** | SUZUKI Takeo、宗教学宗教史学、中国の山岳信仰・身体文化研究、  
異文化コミュニケーション学科長

日時：2021年8月6日(金)

場所：本学神田校舎10号館12階1012Fゼミ室

研究をされている先生方がこの新しい学部集まることで、こういうものができてくるよ、ということが浮かんでくるといいなという風に思っています。私が司会ということで進めますけど、順番に皆さんに話していただいて、あるいはディスカッションしていただく

と思います。各先生から国際コミュニケーション学部で自分の研究はこんな感じでやっている、自分の考える国際コミュニケーション学ってこんな感じで、それにこういう形で寄与していきたい、ということを簡単をお願いします。

**根岸**……年齢が上の順からかな(笑)。僕はフランスの文学研究をやっているので、ある意味で狭い言語に限定されてしまうかもしれませんが、今はポール・クロードルという人について勉強しています。もともとはジャン・ジュネという非常に変わった作家をやっていました。ジュネもクロードルも、基本的には「聞こえない声を聞く」「見えないモノを見る」、それが活動の基本です。その上で、何かを書いていく。それが彼らの姿勢です。そういう意味では、コミュニケーションというものの本質的なところ、特に「聞く」能力、隠れているものを「見出す」のに長けた作家だと思います。普通の情報に接しているだけでは見逃してしまうようなことに、耳を澄まし目を凝らして、それをキャッチするだけでなく、次は作家としてフランス語の言語の力をフルに使って、普通のコミュニケーションの言葉の力ではなく、それを越えた所でどこまで伝えることができるか、という試みに取り組んだ人たちです。ジュネは、社会から疎外された人だったので、見えないもの、聞こえない声を聞きながら社会を想像力によってどう広げ、組み換えていけるかを考えました。一方クロードルは、熱心なカト



f.01 鈴木健郎氏

**鈴木**……今日は、2020年に開設された専修大学国際コミュニケーション学部の「紀要」創刊号の巻頭座談会ということで、異文化コミュニケーション学科と日本語学科の先生にお越しいただきました。皆さんの考える「国際コミュニケーション」とはどのようなものか、これからどのようなものを作っていきたいと考えるか、というテーマで自由にお話しいただきたいと思います。「国際コミュニケーション」というのは、外国語や日本語の知識や運用とともに、多様な分野と関連して成立するものだと思います。いろいろな分野の

リック信者だったので神様を信じて、しかも外交官として日本にも大使として来ていました。そういう意味で、国の幅を広げて世界をひとつに見る、あるいは自然と超自然の世界をどう結びつけるか、そういうことを考えてきた人です。つまり、コミュニケーションというものの基本に触れようとした作家ではないかと思います。こういったコミュニケーションに対する姿勢を学生と一緒に考えていきたいと思っています。

**鈴木**……次に、小林先生はラテンアメリカの研究です。

**小林**……私は専門がラテンアメリカ地域、とりわけメキシコをフィールドとした文化人類学とか、民族学というものが主な研究分野になります。専門としている分野からすると、コミュニケーション力というのはまさに不可欠なスキルです。研究調査を進める上で重要なのがフィールドワークですが、コミュニケーションの取り方によって、得られる情報やデータの質が大きく左右されます。それが研究成果にもろに関わっていくという意味では、自分自身のコミュニケーションスキルをいかに保ち伸ばすかは、非常に大きな課題です。その意味では、国際コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科で学ぶということは、

われわれ教員が研究を通じて得られたことを学びの場に還元すると同時に、われわれも学生たちと一緒にスキルを高めていくこと、それがベースにあると思います。とはいえ、フィールドワークが不可欠な研究分野としては、新型コロナウイルスのパンデミック状況は、研究調査の進捗状況に重大な影響を及ぼしています。ただそれをネガティブにとるのではなく、ウィズ・コロナとかポスト・コロナといった時代にむけて、どのように調査方法、研究手法を練り直していくか、ということが重要であると思います。いまの段階で大学教育に従事しているわれわれが非常に強く感じるのは、オンラインになったことでさまざまな気づきを得たという点です。対面ができないからオンラインになったわけですが、オンラインだからこそ見えてきた課題や可能性があります。それはふだんの授業だけでなく、自分の研究にもフィードバックできるでしょう。危機的な状況でもブレイクスルー、あらゆるチャレンジを試みる、というのも、国際コミュニケーション学部で学べること、この学部で身につけられることだと思います。そういう意味では、ポスト・コロナの中で新しいかたちの学びというものをご提案していくことができるのが、国際コミュニケーション学部ではないかなと、自分の研究分野から見てもそう思えます。

**鈴木**……オンラインの可能性といえば、今日はまさに今井ハイデ先生がドイツからオンラインで参加しているのですね、お願いします。

**今井**……私の研究では、都市計画と文化と国際コミュニケーションの研究と、いくつか異なるものがあります。コロナ下で、小林先生のお話と近いですが、新しいアプローチ、ポジティブ・アプローチが大切です。今回、東京オリンピックで東京の小さな町が問題となりましたが、これはドイツでも同じです。そこでのコミュニケーションは、新しい方法を使わないと、たとえばハイブリッドなコミュニケーションとか、若い人と世代の違う人がいっしょに話し合うのは、けっこう大きな問題です。今年私たちの研究グループは新しい試みを始めました。たとえば remote-geography という概念を使います。東京でもコロナウイルスと古い街づくりや町内会の問題ですね。感染の危険の中、コミュニケーションはとてもむずかしいです。それを



f.02 小林氏のフィールド調査  
(メキシコ、山岳部先住民コミュニティでの野外ミサ)

どのように実現するか。SNSやハイブリッドを使うなどの行為を調べています。10年前の東北大震災の時も、石巻に行って、いろいろな人の話を聴きました。それで、コロナと震災におけるコミュニケーションの違いを比較研究すると、とてもおもしろい結果が出ています。今週からドイツの大きなプロジェクトに参加しています。ドイツと日本とスロベニアで比較研究するプロジェクトがスタートしました。来年度はゼミでこのような新しい研究を学生と一緒にやりたいと思っています。

**鈴木**——オンラインは、若い人なら、日本でも外国でも、あるいは町内会みたいなのでもやっていますが、年配の人は、そのコミュニケーションにどう参加すればいいのか、あるいは東京だけじゃなくて地方のコミュニティではどうにかたちになるのか、そうしたものを全部含めてコミュニケーションを考えるということですね。

**今井**——たとえば、50人にインタビューした時に全部リモートを使いました。これは問題ないです。今は違う国に調査に行きたくても無理ですが、リモートは問題ない。これで新しい調査が可能です。

**鈴木**——リモートによる新しい可能性が出てきているんですね。では次に、日本語学科から丸山先生に来ていただいているので、お願いします。

**丸山**——国際コミュニケーション学という枠組みの中で、言語学がどのように位置づけられるかということ



f.04 丸山彦彦氏

について、少しお話ししたいと思います。そもそも言語学は言語そのものの研究ですから、先ほど根岸先生がおっしゃっていた文学のように、テキストをどう解釈するかというよりは、その言葉の構造そのものを捉えていくことになります。言葉といっても、当然、様々な側面があるわけで、音の問題、単語の問題、文の問題、文章と談話の問題、歴史、教育、情報処理など、さまざまな側面が存在します。日本語学科は、その多様な研究領域をカバーするような形で教員が配置されていて、日本語学あるいは言語学の観点から日本語を総合的に教育するという体制が整っています。私自身は、コーパス言語学を専門としています。コーパスというのは、言葉の大規模なデータベースを指します。たとえば書き言葉を1億語分集めてコーパス化し、それを検索して、その中に出てくる言語現象を定量的に分析するとか、あるいは話し言葉を大量に録音してコーパス化し、その中でわれわれがどのようにしゃべっているかを分析するとか、そのようなアプローチで言葉が実際に使われている姿、言葉の使用実態に迫るという方法論をとっています。

国際コミュニケーション学という視点で考えてみましょう。私がよく言われるのは、日本人なのに、なんで日本語を勉強しているの?ということですよ。日本人が日本語を学んでどうということ? これは、日本語学科の学生もよく問われるようです。ところが、日本語学を学んでみて初めて気づくのは、われわれは日本語を普段使っているけれど、日本語そのものの仕組みについてはほとんど知らないし、きちんと考えたことがないということです。大学一年生が初めて



f.03 今井ハイデ氏



外国人留学生としゃべる機会を持つと、彼らが非常によく日本語のことを知っていることに驚かされるわけです。日本語の文法や発音やアクセントの問題など、そんなことを意識したこともない、知らなかった、そういった気づきというものを一年生の時に与えることを意識的にやっています。結局これは、コミュニケーション、あるいは国際化というところに通じると思います。

つまり、国際コミュニケーションという文脈で考えた時に、当然、相手のことを理解しようとする、コミュニケーションのためのツールを獲得すること、これは非常に大事なことだと思いますが、同時に、自分自身をどう理解するか、自分自身のことを相手にどう伝えるか、という視点も大切になるでしょう。私たち自身はどのような存在なのか、どういうふうに日本という国や文化が存在し、それをどのように対外的に発信して行くのか。このことについて考えることも、やはり国際コミュニケーションにとって非常に大事な側面だと思います。この国際コミュニケーション学部にはGC(異文化コミュニケーション学科)とGN(日本語学科)があるのは、象徴的だと思います。つまり、外に向かっていく方向性と、内に向かっていく方向性、その両方の視点がないと、国際コミュニケーションというのは成立しないのではないかと思います。

昨年度、「日本語入門」という授業をGCの方で担当しました。日本語学の初歩を論じる講義でしたが、GCの学生からはとてもいい反応が返ってきました。日本語を母語にする学生に日本語の仕組みについて講義をすると、そんなこと知らなかった、考えたこともなかった、そんなことが自分の頭の中に知識として入っていることに初めて気づいた……など。そんなところから自分自身に対する意識の明確化、気づきを促すような授業をしていきたいと思ひますし、言語学はそれにとても効果的に寄与できると考えています。

**鈴木** 丸山先生から、日本語というものを「国語」ではなくて、外国語とか言語として普遍的な観点からみるというお話がありました。外国語は単なる「ツール」だといった言い方、言語を内容と分離できるような誤解もありますが、言葉は人間の認識や心と直接関わっている。また、言語学がないまま文学作品だ

け読めるというものではない。

丸山先生の紹介された「コーパス」は多様な時間と空間の日本語を網羅しようとするわけですが、トンブキンス先生は、戦前の日本のことを研究されていますね。

**トンブキンス** 私は、出身はアメリカで、実は、ここと同じような、アメリカのinternational studies＝国際研究の専攻で、日本を中心に勉強しました。日本語を3年間勉強して、3年目の1年間は日本での留学ができました。とても貴重な経験でした。だから、いま国際コミュニケーション学部で研究したり教えたりできるのは本当に嬉しいです。いま私の研究は、現代日本の女性運動が中心ですが、女性運動の歴史には、実は国際交流の例がたくさんあります。市川房枝や平塚らいてうなどの女性運動家が、海外の女性運動のリーダーとよく交流しました。たとえば、1922年に加藤シヅエは、有名なアメリカ人の産児制限運動のactivistであるサンガー(Margaret Higgins Sanger)に会って、日本で公演ツアーをしました。日本は1933年、女性の運動をしている中で、市川房枝とほかの婦選獲得同盟のリーダーたちは、シカゴなどのアメリカの都市の女性のhousekeeping運動に感化されました。このような事例は、国際コミュニケーションが現状だけではなく、長い歴史を持ち、世界中で大事な役割を果たしてきたことを示しています。



f.05 レベッカ・トンブキンス氏

もちろん現在のSNSやインスタント・コミュニケーション、世界中どこでも旅行できる時代では(いまはコロナでできませんが)、共通の目的をめざして異文化の人々が共有できるツールとして、国際コミュニケーションが大切になっていると思います。

**鈴木**……日本ではどちらに留学していらしたのですか？

**トンプキンス**……三鷹市の国際基督教大学です。

**鈴木**……そのあと、オランダにもいらしているそうですね。

**トンプキンス**……博士課程はオランダのライデン大学でした。4年間の真ん中1年間は日本で、それ以外はオランダにいました。

**鈴木**……オランダも日本との関係が深いですね。次に、英文学を専攻されている宮本先生をお願いします。

**宮本**……コミュニケーションについてまずは微視的なところから、私のコミュニケーションの癖からお話させていただきます。癖と言えばいいのか、研究の傾向と言えばいいのか、どうやら自分は論理的な道筋を通して世界を切り分けて整理していくというよりも、むしろ分析に抗うような傾向があると自覚しております。分析に抗って、まずはそのままに浸る、その時間稼ぎをするために、口ごもったり、息を潜めて盗

み見したり、軽口を叩いたりする、そんな癖があります。ただ、分析的・説明的な言語を自由自在に駆使することを目指した教育を受けてきたので、そのような傾向を「自分の癖」とはとらえずに、むしろ「劣ったところ」「矯正の対象」として抑圧もしてきました。しかし、分析的・論理的である堅牢な道筋をいざ引いてみたら、借り物の論理や上滑りの言葉を自分が話しているような気がしてきて、嫌になってしまいうことが多々ありました。反対に、分析的になることに抗い、詩や小説から受けた感覚や思考の道筋に対して、なるべくそれに見合った言葉を見つけるまで十分に言葉を引き伸ばすことができた時には、しっくりきました。そんなことを繰り返すうちに、たとえ学術研究であっても、分析的であることに抗う身振りも、単に「癖」というのではなく、世界をどのように見るか、クリティークの一つのあり方ではないかと思うようになりました。特に、越境的で多層的なコミュニケーションを想定し模索する本学部に属してから、そんなようなことを考えるようになりました。

文学を専攻しそのなかでもとりわけ詩に傾いていたのも、あとから考えれば、このようなコミュニケーションの癖に強く関わっていたからだと思います。文学は「言い方」に非常にこだわる形式であり、とりわけ詩は個々の詩人たちの「言い方」の癖が強く、世界の見方やヴィジョンを論理的に翻訳するのではなく、そのような言い方しかできない形で提示するものなのです。もちろん、何かの文脈に置いて考えて整理したり、論理的に翻訳することがあっても、なるべく最後の瞬間までそういったことを先延ばしにする、それが究極的には詩ではないかと。そして、詩を語る言葉もまた、分析をなるべく先延ばしにしながら、詩の言語や論理に陶醉したり拘泥してみる、そんなあり方で良いのではないかと思うようになりました。先ほど根岸先生が「見えないものを見る、聞こえないことを聞く」とお話しされたことと重なるかもしれませんが、私が惹かれる詩人たちもアンダーステートメントな詩人たちです。「控えめき」のなかに在るものをよく見て、よく聞き、それを「控えめ」な身振りで声にするような詩人たちです。時に勇ましいオーバーステートメントの詩人であっても、オーバーな身振りで〈あるもの〉を抑圧し、抑圧したがゆえにそのまま保



f.06 右から、小林貴徳氏、宮本文氏、根岸徹郎氏、  
グローバルフロアにて

ち時間稼ぎをするようなところがある人もいます。そんな詩人たちが、性に合うのだと思います。

このような文学と親和性を持った「反-分析的」なコミュニケーションの強みは何か考えると、教育面で言えば、コミュニケーションという言葉のもつ大きさに圧倒されずに、当たり前ですがコミュニケーションのやり様は色々であり、個々人の癖を知るところからまずは始めてもいいのではないかと、そんな風な微視的なレベルからの視座を提供しようとするところでしょうか。また、多様性の時代が必然的にもたらす混沌、正解のなさ、場合によっては正義のなさに、強靱に耐えぬくしぶとさにあるのではないかと考えています。多様性について、分析的に切り分けていく言説は日々、洗練され先鋭化しております。その一方で、圧倒的な説得力が、ときに多様性がもたらす混沌さを綺麗にしすぎている気もしなくありません。「反-分析的」なコミュニケーションは、居心地の悪い混沌に留まり目撃しがき続けるしぶとさを得意とするのではないのでしょうか。

**鈴木**……宮本先生のお話は、通常のコミュニケーションにうまく回収できない、乗らないようなものを含めて、「コミュニケーション」の可能性を考えるという、深いところのお話だったと思います。

国際コミュニケーション学部のカリキュラムは、日本語学科も、異文化コミュニケーション学科も、言語学や語学が基礎にあります。学生は留学の機会もあり、複数の言語・外国語に触れる中で、言語とは何だろうかということを普遍的・理論的に考えることになります。世界中に多様な文化や言語があって、空間的にも時間的にも差異があって、そういう多様性は実際には理論の枠に回収しきれないけれども、できる限り分析するのが学問だということで、学生には実証的な手続きとかデータの解釈とかの勉強はしてもらふことになる。言語学だけでなく、社会学や人類学などの理論や知識も学ぶ必要がある。さらに、理論や分析に回収しきれないものもたくさんあるといった視点や感覚、それらを全部学べるというのがよいと思います。人類学や地域研究では、なかなか人が行かないところにフィールドワークで入って調べて、そこで言葉や五官でコミュニケーションして、一緒にご飯食べてお酒飲んでみたいな感じで、いろい

ろなものを作っていく。そのやり方は、この人はマイノリティでとか、既成の枠にきれいに分類しきれるようなものではない。もちろん、社会階層とかジェンダーとか、そういう概念自体がまだよくわからない学生には、歴史的経緯も含めてしっかり教えないといけないけど、一方で、学術用語や分析概念を使って分類したらトコロテンみたいに答えが出てくるっていうものじゃないということも理解してもらいたい。言葉とか文化とか人間の心には非常に深みがあるということを学べる、それは文学をやっている先生がいらっしゃるポジティブな作用だと思います。この学部・学科の教員は、研究している地域も時代も分野も多様で、教員同士もまさに国際コミュニケーションとか異文化コミュニケーション的で、学生はその様子を見ながらバランスよく学んで行くことができると思います。

**根岸**……僕たち研究者個人は、ひとまず答えを探さないとはいけないとは思いますが、それを受ける人たちにとっては、ある意味、鈴木先生がおっしゃったように、結局、明確な答えというものはないともいえると思います。むしろ答えがないことが答えなんだと思うので、なんでこの答えを探すかっていう問いかけの方が大切で、だから学生が問いかけを自分で見つけてもらった方がよいかなと思うし、この学部で学ぶ意義というのはそういうところにあるのではないかと考えています。

ところで丸山先生にうかがいたいのですが、高校までは日本語ではなくて国語ですが、その国語と日本語の差が、学生たちが不思議だとか知らなかったとかいうことに影響しているのでしょうか？

**丸山**……国語と日本語の違いというのも必ず授業で説明するようにしています。日本の中で国語と言えば、日本の国内で広く使われている言葉を指します。一方、日本語というと、世界中に数多くある言語の一つ、という位置づけになります。象徴的だったのが、2004年に「国語学会」という学会が「日本語学会」に名称を変更したことでした。我々がやっているのは「国語学」なのか「日本語学」なのか、かなり論争があったんです。21世紀という新しい時代になって、国語学という閉じた世界ではなくて、一般言語学の中での日本語という扱いをやっていきこうということで、最終的には日本語学会に改称されました。先



ほども申し上げたのですが、高校生まで「国語」は学んできた、でも「日本語」のことは知らない、そういうところに問題点を見つけ、自分の頭の中ってどうなっているんだっていう問い、発見、気づき、根岸先生の言い方だと「問いかけを自分で見つけられる」、そこへ導いていける、というのが日本語学の面白いところだと思います。

**根岸**……国語学会が日本語学会に変わって、もともと国語学会の英語名称はJapaneseだったんですか？ National Languageとはならないでしょう？

**丸山**……現在の日本語学会の英語名称はThe Society for Japanese Linguisticsですが、国語学会の英語名称はThe Society for the Study of Japanese Languageだったと思います。

**根岸**……英語にした時国語はJapaneseになると思うんです。そのあたりの矛盾というのは、すごく問題をばらんでいて、たとえばフランスではフランス語を「国の言語」とは呼ばず、もちろん、「フランス語」です。

**トンプキンス**……アメリカはイギリスではないので、英語＝Englishしかないです。国はアメリカですが、「アメリカ語」はないです。

**丸山**……ちなみに私が専修大学に来たのは2016年ですが、そのまえは国立国語研究所というところになりました。そこはいまでも国立国語研究所です。英語名称はNational Institute for Japanese Language and Linguisticsですが、1948年の設立当初はThe National Language Research Instituteといました。

**宮本**……それは「国語」を直訳したんですね。

**丸山**……そういうことだと思います。

**根岸**……本学部の名称を考える時にも、いろいろな候補が出ました。「国際」という言葉はやめた方がよい、いつまでも「国」という概念でもないだろうと。Internationalはまだ少し通用するにしても、Nationalという概念はもう変わってきているので、「国際」という言葉にひきずられない方がいいんじゃないかという意見も出たんですが、いろいろな事情でこうなりました。

**鈴木**……国際コミュニケーション学部がSchool of International Communication、異文化コミュニケーション学科がDepartment of Intercultural Communicationとなりました。

**根岸**……でもglobalも中国語だと「地球的」とかになるでしょう？

**鈴木**……どの言語を使っても難しい。確かに、内向きに考えるか、外から客観的に見るかが、日本の場合は英訳するときに出やすい気がします。コミュニケーションだと、「読む・聞く・書く・話す」のほかに「見る・見せる」というのがありますが、異文化コミュニケーション学科の授業だと、映像コミュニケーションや身体系のコミュニケーションを柱にしてカリキュラムを作っています。ドキュメンタリー映画監督の先生も、表象文化論の先生もいらっしゃいます。

**根岸**……「読む・聞く・書く・話す」というのは、あくまで主体があって、「私が」ということで、それはかなり西欧的な考えですね、「読む私がいる」「書く私がいる」と。それに対して、ドキュメンタリーというのは、撮ったものを主役に返さなければならないですから、そう意味ではおもしろいもので、「見せる」というのを「私」がないところで見せなければならないから。

**鈴木**……ドキュメンタリーに主体性がないということはないですね。あたかも主体性がないかのように作ってある場合でも、そこに出てくる主体性というのは明らかにある。編集などを通して、わかりやすい意図や主体性が出ていることもある。今井先生は、根岸さんが言われた主体性の問題はどう考えられますか？ 今井先生の場合、フィールドワークの調査結果というのは、対象そのものがこうですよって客観的に示して、自分の考えは極力出さない、現地ではこうなっていると示すようにするのですか、それとも、これはこういうことではないかという範囲で、先生の研究者としての主体性をむしろ出すべきだとお考えですか。あるいは、それについてバランスがあるのでしょいか？

**今井**……フィールドワークでは、「聞く・話す」などのほかに、匂い＝tasteなどのsense、つまりロジカルなコミュニケーションだけでなく、全部使います。何を見たか、何を聞いたか、匂い、気持ち、リズム、メロディーなど全部使います。このようなコミュニケーションがあります。どうdetailが違うか、たとえば日記を書く時に、何を見たか、何を話したか、書くだけでなく、スケッチを使ったりすることもできます。学生には、国際コミュニケーションではそうしたものを全部使ってくだ

さいと言っています。

**鈴木**……おもしろいですね。ロジカルにコミュニケーションしているだけでなく、フィールドワークに行った時には、その日のお天気から、においから、気持ちから、そういうものを全部使ってコミュニケーションしているということですね。

**小林**……フィールドワークは、まさに全身そこに浸かるわけですから、論理的に事前に準備してもすべて実現できるとは限らない。突然雨が降ってきて、すべてが中止になるとか、いろいろな状況が起こりうる。まさに匂いは、脳のすごい奥底にしみこむんですね。ある時、この匂いをかいだら、ふっとフィールドワーク中のある場面を思い出すということはよくあります。全身そこにどっぷりひたるとするのが、一つのコミュニケーションのあり方だと思います。だからこそ余計に、現地調査に行くことができない今は、そこが恋しくてしょうがないんですけども、それに代わる方法で、このポスト・コロナを生き抜いて行かないといけないわけです。

**根岸**……僕は演劇なので、演劇は基本が劇場で観るもので、匂いとか、すわった席が寒いとか、そういう要素もいろいろあります(笑)。そういった意味でも、バーチャルな要素が大きく介入してくるであろうポスト・コロナの演劇はどうなるのか。五感を使うのはたいへんだと思います。

**小林**……コミュニケーションという意味では、コロナ以前は他者と共感を得やすかったです。ともに時間と空間を過ごす、そこの同じ空気を吸っていることで、何らかのかたちで共感をよぶ状況ができやすかったのですが、今はzoomとかmeetとかで、そこがなかなか見込めないことになっている。その一方で、シンパシーとかエンパシーとか、共感力が非常に求められている中であって、われわれはそこを研究調査の中でどう乗り越えていくか、大学の学びの場で、それをどう伝えていけるのかが大きな課題となっている。本学部は、これだけいろいろな学術分野の先生が集まっているから、きっとよいアイデアが出てくるんじゃないかと期待しています。

**根岸**……演劇の一つの基本は「いまここで」なんです。これがコロナで崩れるわけです。今井先生が「いまここで」といっても、今井先生がいるドイツは午前8

時で、そうすると時間って何なのか、ということにもなる。映画の授業をやっていると思うのですが、映画が生まれた時は、同じものを同じ場所で見るというのがベースだった。それがいまでは、100年前の映画を見ることもできるし、個人が個別に見ることもできるようになった。メディアでは、このようないろんな可能性ができていて、新しいかたちが生まれると思う。こういうことも考えていかないといけないと思うんです。

**鈴木**……今井先生がおっしゃっていた、フィールドでのコミュニケーションの問題ですが、私もフィールドワークをやるからよくわかります。現地に体を持っていくことで、全然違いますね。まさに身体の問題で、五官を使って全身で、身体とか人間だけではなく、動物とか空気とか空間とか、その世界全体とのコミュニケーションがある。この学部学科を作る時には、ちゃんとそこまで考えて、映像コミュニケーションとか、身体のコミュニケーションが入っていて、それが言語コミュニケーションとばらばらにならないように、場合によっては自然環境も含めたような、そうした全体でのコミュニケーションの重層的な様相を学生に示してみたいということで、この学部学科を考えたいですね。

文学にしても演劇を含んでいるともいえるし、その一方で、なまの経験とか、空間というのは「いまここで」という限界がありながら、それが映像となりドキュメンタリーとなったり、その言語の人が言葉にしたり、歴史的な資料になったりすると、「いまここで」という時間空間を超えて、違う場所、違う時代のものを体験できる。言葉とか映像というのは身体にむかう直接性においては、やはり一歩ゆずるところがあるとしても、ある意味で抽象度が高く、普遍性というか、むしろ時間空間の制約を超えることができるという点で、そういう乗り物になるというのはおもしろいと思います。そして、そこにポスト・コロナの可能性も出てくるんですね。

**根岸**……今井先生、ドイツにも日本のような、道と呼べるような、狭い通路のような路地ってあるんですか？

**今井**……あります。ライプニッツは古い町で、フィールドワークでたくさんの人と話しました。コロナのためにコミュニケーションがどうなっているか、たとえば、



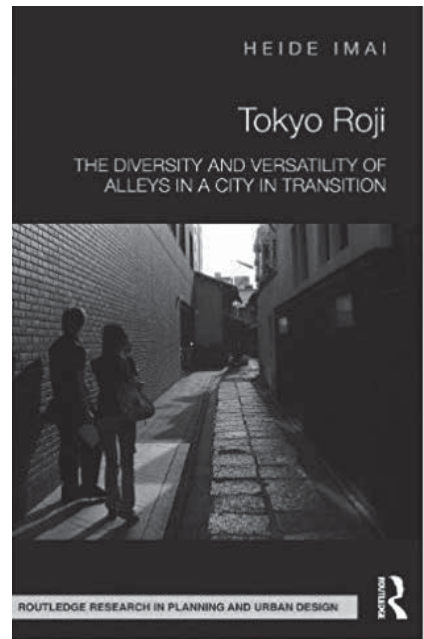
実際に話すのと、リモートではどうなっているか、これはおもしろい課題です。新しいコンセプトをやっている人もいて、お店の前にオンライン・ボックスを置いたりしています。それから、商品を卸売りする大きな店にも行きました。日本でいうと築地とかにあたります。そこで何十人の人々と話しました。私たちは豊洲にも行きましたが、豊洲ではコミュニケーションはぜんぜんありません。豊洲では魚の匂いがきつくて、お寿司を食べようとしても、若い人には無理だと思います。こういう研究の結果は非常におもしろいので、機会があったら話したいと思います。

**鈴木**……オンラインで便利になる一方、匂いとかに対して感覚が変わってしまう可能性はありますね。コロナのせいで歴史ある地域文化も変わってくる。今井先生は神楽坂のことを書いておられましたが、神楽坂はおしゃれな町になって、若くてインテリジェントな人が入ってきて、そういう人たちはオンラインでも時代に合わせてやっていけるけれど、お年寄りの人たちはもう降参という感じになってしまうこともある。そういうコミュニケーションの問題は、どうなるんでしょうか？

**今井**……オンラインのコミュニケーションはとてもむずかしいので、飲み物とか食べ物を通してする小さいコミュニケーションが役に立っています。自分がどう



f.07 今井氏の研究対象—東京の路地



f.08 今井ハイデ著『Tokyo Roji』

してまいれしいか、それをコーヒー飲みながら話したりするのがとてもいい。コロナでもプライベートなコミュニケーションは守られるが、外で少しみんなと話したいという気持ちが強い。それが、神楽坂がおしゃれになっていることとマッチして、普通のコミュニケーションをしています。

**鈴木**……ちょっとコーヒーを飲むとか、そういった日常的な小さいコミュニケーションが切実になってきているということでしょうね。

**丸山**……さきほどの「いまここを超える」という話をちょっとしたいのですが、日本語で録音された音声の中で最も古い記録って何年だと思われますか？現在のところ確認されているのは1900年、パリ万博で録音された音声です。パリ人類学会が当時出回り始めていた録音機を持ってきて、世界中から集まってきた人々の声を録音して回ったという記録があります。1900年8月28日、新橋の料亭の女将さんのおしゃべりを録音したものがフランス国立図書館に残っています。岩間くにさんという方で、当時42歳か43歳ぐらいです。〔録音を流す〕いかにも古い録音ですが、ほとんど理解できますよね。ところが、120年前の新聞になると、これは読めませんよね。これは書くことと話すことの乖離という点でもあるのですが、このように日本語の歴史を遡ってコーパス化することもでき

るわけです。それから、次の音声を聞いてみてください。どこの方言か分かりますか？〔録音を流す〕これは鳥取県です。1984年の高齢者の録音ですから、明治生まれですね。

**小林**……一つは「せ」と「し」ですね。僕は鳥取出身ですが、もはやネイティブじゃないんで、わかりませんが、（大黒さんを）「であくさん」と発音するのは特徴かもしれません。

**丸山**……書き言葉、話し言葉、どちらもコーパスがあります。また、同時代の言語を集めた共時コーパス、異なる時代の言語を集めた通時コーパスがあります。書き言葉の通時コーパスとしては、奈良時代から日本語のテキストを1300年分ぐらい集められるわけですが、話し言葉の場合は120年ぐらいしか音声の記録が残っていませんから、なかなか通時コーパスとするのは難しいところです。私はここ数年、1950年代の音声を発掘してコーパス化する仕事に取り組んでいます。現代の話し言葉コーパスと連結すれば、話し言葉の通時コーパスができるわけです。

**根岸**……さきほどの新橋の芸者さんの日本語は、小津安二郎の映画に出てくる文学座の俳優さんの話し方にそっくりです。

**丸山**……いい着眼点ですね。もう一つだけお聞かせします。次は1957年の録音で、20代の女性の発話です。〔録音を流す〕これ、いかにも原節子っぽい話し方ですね。こういう実態は、やはり音声を聞いてみないとわからない。これも過去の音源をコーパス化することによって分析できます。要は、空間的な広がり、つまり方言、外国語もそうですが、それから時間的な広がり、通時的な方向になるのですが、そこに言葉の多様性を確保したうえで、それに

対してどのようにアプローチしていくかというところが問題になるわけです。

**鈴木**……フランス語はどうですか？100年前のフランス語はいまとくらべてどうなのでしょう？

**根岸**……100年前のフランス語は聞いたことがないからわかりません。

**鈴木**……映画などには残ってないんですか？

**根岸**……声の入った映画は100年前は

まだないから。でも、初期のころのトーキーのフランス語はわかりやすいです。さっき、映画の中の日本語という話がありましたが、それは本当の日本語なのかという問題があります。出てくるセリフだから、実際のセリフじゃないので、普通は「あー」とか「えー」とかがあるけど、演劇ではそういう言葉は絶対に入っていない。そういう意味では、小津安二郎の映画のセリフは独特でしょう。それを日本語と言えるのだろうかという問題がある。

**鈴木**……英語はどうなのでしょう。シェイクスピアの英語が読みにくいということはあるんでしょうか？

**トンプキンス**……いや、いまでも読めると思います。高校で勉強しました。

**根岸**……日本とは違いますね。日本じゃ近松門左衛門は絶対に読めない(笑)。

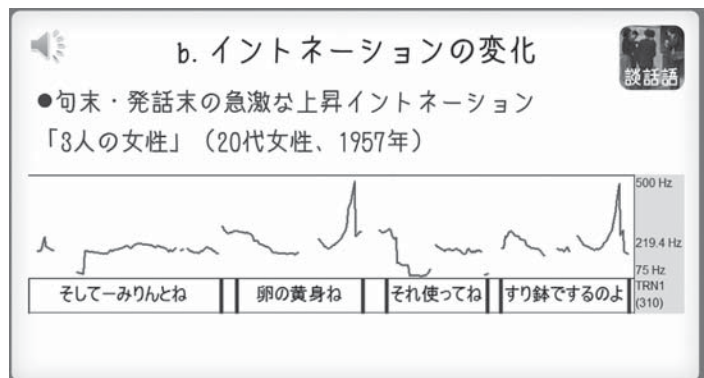
**鈴木**……英語だと、100年200年ぐらい前でも全然問題なく読める？

**トンプキンス**……そうですね。シェイクスピアは400年ぐらい前でしょ。

**鈴木**……英語は世界中で話されていますが、アメリカでも方言があるでしょうし、階層によっても違うだろうし、旧植民地で話されている英語もまた違うと思います。トンプキンス先生がいままで聞かれた範囲の英語ではいかがですか？

**トンプキンス**……オランダに住んでいた時、座談会に参加して、ある研究者がスコットランドのどこかのご出身で、英語ネイティブなんですが、この人の英語は全然わからなかった。あまり聴いてない方言だったら、やはりわかりません。

**丸山**……方言話者は、よほどの高齢でない限りバイリンガルです。



f.09

**根岸**……トンプキンス先生にとって、わかりにくいのはどんな日本語ですか？

**トンプキンス**……速い日本語ですね。

**小林**……地域差という点では、広大なスペイン語圏内の地域差はおもしろいです。スペイン国内でもかなりの地域性がみられますし、ラテンアメリカ各地はもちろん、アメリカ合衆国のヒスパニックなど多様を極めています。個人的には、アルゼンチン人のスペイン語はイタリア語のようなリズムや抑揚を持っていて個性が強いと思います。また、カリブ海域で話されるスペイン語では、単語の「s」を発音せず、音が飲み込まれてしまうことが多いです。そんな多様性のなかでもおもしろいのが、みんな自分たちの話すスペイン語が一番きれいだと言っている点ですね。ほかの国や地域のスペイン語に対しては、「聞きとりにくい」「速すぎる」「遅すぎる」なんて批判します。とりあえず自分たちのが一番いいわけです。いろいろな国の人の意見を聞いてみると、聞き取りにくいとよく挙げられるのはチリのスペイン語でしょうか。あと、スペインの中でも中央部、マドリードのスペイン語です。速すぎて何を言っているかわからないし、そもそも彼らは人の話を聞かない(笑)。

**宮本**……それはボキャブラリが違うのですか？

**小林**……ボキャブラリの違いもありますが、直感的にわかるのは話し方ですね。スペインでも、ポルトガルの北部にあたるガリシア地方は、日本人の気質に非常に近くて、空気を読む、人に気遣いができるような話し方です。一方、ラテンアメリカだと、アルゼンチン人のスペイン語は抑揚があって歌っているみたい。コロンビアやメキシコのスペイン語は明瞭で、個人的には一番聞き取りやすいと感じます。そうした差異は、国や地域ごとに異なる歴史的背景によると思います。たとえば、チリとかアルゼンチンの場合はドイツ出身とかイタリア出身とかの移民の影響があるでしょうし、カリブ海地域だったら、そのルーツとしてアフリカ大陸が浮かび上がります。クレオールかピジンかは別としても、ルーツとなる国や地域の言語との混ざり具合、そういった部分はあると思います。また、メキシコの場合、ボキャブラリのレベルで先住民族の単語が借用されていたり、スペイン語化していたりというケースもかなりあります。そうし

た多様性は非常に興味深いし、自分たちの言葉が一番いいんだっていうのはおもしろいですね。

**根岸**……たとえば、カナダのフランス語は、自分たちのフランス語が一番と思っているのか分からないけど、移民をした時の当時の言葉が残っているの、オーストラリアの動物みたいな感じで、本国では使われなくなった表現などが残っていて田舎っぽく聞こえるといいます。フランス人っていうのは、ほかの地域のフランス語をちょっと軽く見るので嫌なんですけれども。スイスとかベルギーとかも何となく下に見るんですね。ベルギーのフランス語ってなにあれとか。ベルギーのフランス語はすごく分かりやすいし、ベルギー人は人がいいし、とても好きなんですけれど、それをからかったりするフランス人が嫌だなと思ったります。ベルギーは食べ物もおいしいですよ！

**鈴木**……だいぶまとめにくい感じになってきましたが(笑)、でもおもしろくて、小林先生がお話になった、全員が自分のところのお国言葉が一番だと誇りを持っているっていうのは、すごく恵まれた状況で、逆に、コンプレックスを持っていて、日本でも関西人は方言でも平気でしゃべるけど、東北の人は嫌がる感じがあたりする場合もあって、これは歴史的な抑圧関係があるわけで、スペイン語にはそれがないということですね。

**小林**……外に出る人間は影響をもろに受けますよね。自分の育った文化や言語というのを、客観視・客体化する経験をとおして、あえて劣位に見ることが多い。とはいえ、人によっては、15年も20年も関東にいても関西弁をしっかりと守っている方もいる。

**根岸**……むかしグリコ森永事件というのがあって、脅迫文があって「食べたら死ぬて」と書いてあったんで、関西出身の僕なんかからするとど迫力があったんだけど、ニュースでNHKのアナウンサーが言うのと、まったくおもしろい話ではなくて、文字を音に変えただけみたいで。関西弁であれを言うと、本当にこわい感じなんです。

**丸山**……アルゼンチンではスペイン語を話しますが、アルゼンチンの人たちは、自分たちの言語を「スペイン語」と言うんですか？

**小林**……やはり「スペイン語」と言います。逆に、スベ



イン人は「スペイン語」と言わず、「カスティーリャ語」と呼ぶことが多いです。スペインでは、スペイン語のほかに、「カタルーニャ語」「ガリシア語」「バスク語」「バレンシア語」などいくつか自治州ごとに定められた公用語があって、それは憲法でも認められています。スペイン国内の他の地方の人たちは「カスティーリャ語」を「スペイン語」とは呼びたくないんです。

**鈴木**……では「エスパニョール」というのは、どういう概念ですか？

**小林**……一般的には「スペインの言葉」という概念ですが、スペイン国内では中世のカスティーリャ王国の言語に由来するので「カスティーリャ語」と呼ばれます。16世紀に新大陸に渡っていった征服者たちがこの言語を使用していたこともあり、宗主国のスペインから伝わった言語ということでエスパニョールというわけです。

**鈴木**……現地に行って、「Can you speak English?」みたいな感じでSpanishとかエスパニョールとは言えないということですか？

**小林**……スペイン国内ですか？たとえば、外国人がバルセロナで「スペイン語を話せますか」と現地の人に尋ねた時なんか、「知ってるけど話したくない」とか「私はカタルーニャ人なので話さない」とか「スペイン語なんて知らないよ、カスティーリャ語のことかな」とか、そういう対応をされます(笑)。さっきの国語と日本語と同じような話になります。

**根岸**……フランスではEUが始動する直前に、憲法に言語に関する文言を入れたんです。フランス共和国の言語はフランス語だという一文です。それで、オクシタン語とかプロヴァンス語とか、フランスの地方言語を全部切ってしまうことになってしまった。そういうことをやっちゃいけないだろうと思いつつ、英語という巨大なものに対してフランスが小さいので、政治的に守るためにそうしたら、国の中の小さい言語を圧迫することになってしまった。

**宮本**……アメリカには、Official languageはないんです。

**根岸**……日本でもあまり言わないですね。公用語というのはあるんでしょうか？

**丸山**……日本では「共通語」という概念はありますが、「公用語」という概念はありませんね。また、政治が言葉に対して関わりを持っていくことを言語政策とい

いますが、日本の言語政策では、「正しい日本語」というのはないんです。内閣告示で言葉遣いに関する指針は出るのですが、提案レベルでしかない。「正しい日本語」とか、「美しい日本語」というのはない、というのが、言語研究者の立場です。もちろん教育の現場では正しさを誤りが問題になるわけですが、教育側に軸足を置くか、言語の実態記述に軸足を置くかで、そのような視点は変わってくる。最近のツイッターでも、漢字のここがはねてないから×、という国語テストの話が問題視されていましたね。結局、どのような立場で基準を定めるかだと思います。

**鈴木**……そろそろまとめたいんですが、個別のところには多様性とかが出てきて、あまり乱暴には括れないということが分かってきました。そういう個別のいろいろな細かい多様性とか、細分化される問題をざくっとした箱に入れて、いい加減にしてしまわないかたちで、しかもそのあいだでコミュニケーションが大きく成り立つということ、そういうことが可能なのかどうか、そこをまさにこの学部で実験していく、研究していく方向なんだと思います。本日は長時間ありがとうございました。